

## 協力隊の経験を子どもたちに

「こんな田舎でも、実は世界とふかーくつながってちゅうがです」

高知県西部、日本最後の清流、四十万川の程近く。青く澄んだ空を見上げながら、四十万町立七里小学校校長の坂山英治さんは言う。「この辺のコンビニの弁当も、食材の多くは海外からの輸入品です。一度、生産国を全部調べて高知までの道のりを合わせてたら、約10万キロあった。つまり地球を2周半も旅してきたということ。これを授業で子どもたちに計算させたら、みんな目を丸くして驚くがですよ(笑)」。ふるさとの高知で教師になって22年。四国では、途上国の人々の暮らしや文化を知り、日本とのつながりを考える「国際理解教育・開発教育」の草分け的存在として知られる。

漁師の家に生まれ育ち、いつかは自分も海の男になるつもりだった坂山さん。だが商船高等専門学校時代、実習船で太平洋を回りトンガを訪れた際、貧しくモノがなくてもゆったりと暮らす人々の生き方に触れ、「もつと世界を見んといかん」と考えるようになった。そして2年間の会社勤務の後、青年海外協力隊の船舶機関隊員として大洋州・パプアニューギニアへ。首都から800キロも離れた小島で、エンジン付き小型船舶の使い方やメンテナンスの方法を人々に教えてきた。そこでは、頼んだ作業がまったく進んでいなかったりするなど、仕事のリズムの違いで意見がぶつかり合うことも少なくなかった。「でもだからこそ、お互いの違いを尊重する異文化理解の大切さを肌で感じる事ができた」と当時を振り返る。

帰国後、「協力隊の経験を子どもたちの教育に生かしたい」と教師の道へ。以来、担任としての業務や授業に追われる中でも、協力隊時代の話をしたり、当時はまだ珍しかった国際理解教育を実践したりしてきた。さまざまな言語のあいさつを吹き込んだテープなど、手作り教材も多数作成。ユニークな取り組みに子どもたちも大喜びだった。「『変わった先生やなあ』』と言いながらも、『次は何やるが?』と、皆楽しみしていましたね」。



パプアニューギニア・ブーゲンビル島で活動した協力隊時代の坂山さん。この時の経験が、後に国際理解教育に力を注ぐ原点となった

高知県四万十町立七里小学校校長  
Sakayama Eiji

## 坂山 英治さん



グアテマラの小学生たちに手紙を書く窪川小学校の児童。ハリケーン被害の支援がきっかけで、交流が生まれた。坂山さん(左)にとつての忘れられない思い出の一つ(写真提供:高知新聞社)

## 世界のために考える行動できる人間を

教頭として赴任していた四万十町立窪川小学校時代、総合的な学習の時間に坂山さんが子どもたちに紹介したグアテマラが、ハリケーンに被災する。そこで、全校を挙げての募金や、バザーでのグアテマラ製手工芸品の売り上げなどで集めた支援金を送ることに。後日、ハリケーンで山崩れの被害を受けた地域の小学校から、うれしい知らせが届いた。支援金で苗木を買って山の修復のために植樹し、そこに窪川小の名が入った感謝の記念プレートを立てたのだという。海を越え、自分たちの思いが伝わった驚きと喜びに沸き立つ窪川小の全校児童。「そのときの笑顔は、今も忘れられない」と話す。

一方、国際理解教育の輪をさらに広げようと、坂山さんは校外でもさまざまな活動をを行っている。その一つが、教師による自主勉強サークル「国際理解の風を創る会」の設立。2カ月に一度メンバーが集まり、新たな授業の方法を研究したり各自の経験を共有したりしながら、国際理解教育のスキル向上に努めている。1995年、3人でスタートした会は、今では10人程が集まるまでに。

また、小中高生向けの県内の国際イベントや、四国NGOネットワーク※とJICA四国が共催する四国4大学

「国際協力論」講座でも、講師として活躍。最近では、JICA教師海外研修の参加者に対する事後研修でも、途上国での経験をいかに教室で活用していけばよいか、さまざまなアドバイスを送っている。

「中には『他の国のことを教える暇があるんやったら、受験に役立つ授業をすべき』と考える教師や親もおるかもしれん。でも、僕はこれからの時代、どこにおったとしても世界のために考えをめぐらせ、行動できる人間が絶対に必要やと思うんです」

多くの人々にとつて、まだ「藩」が一国にも等しかった幕末の時代、土佐郷土・坂本龍馬は藩を飛び出し、「日本人」としての生き様を模索し続けた。それから約150年。グローバルゼーションとともに日本を取り巻く環境は大きく変わり、今、私たちはまさに「地球市民」としての視点が不可欠な時代に生きている。

「こうした活動に情熱を傾けているのは、やっぱり自分のふるさとが好きやから。ここにいながらにして、子どもたちが世界に触れる機会をつくってやりたい。高知発『地球市民』を育てたい」

土佐っ子たちを見つめる坂山さんのまなざしは、どこまでも温かく、そして優しい。

### さかやま・えいじ

1958年高知県出身。商船高等専門学校を卒業後、建設機械販売会社での勤務を経て、79年より青年海外協力隊・船舶機関隊員としてパプアニューギニアで活動。その後、教員免許を取得し、88年より高知県で小学校教師として勤務。中土佐町立久礼小学校教頭、四万十町立窪川小学校教頭、高知県教育委員会などを経て、2009年4月より現職。「国際理解の風を創る会」会長、NPO法人開発教育協会四国地域連絡担当、四国NGOネットワーク運営委員。



高知大学で「国際協力論」の講義を受け持つ坂山さん。生きた国際協力を学べると好評だ



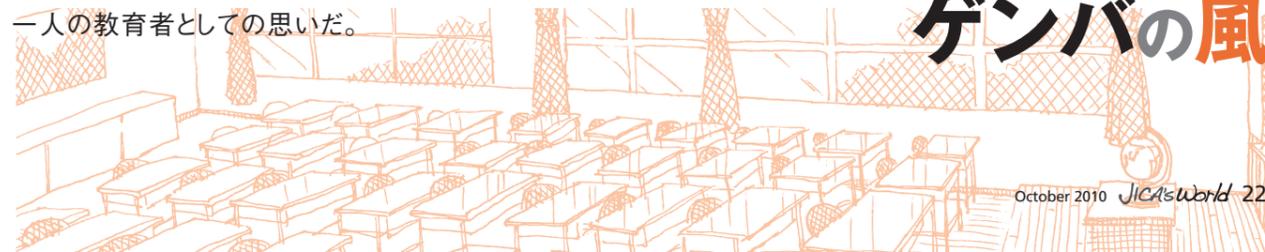
教師海外研修の参加者に、その経験を生かした国際理解教育の実践についてアドバイスを送る坂山さん。子どもたちの興味や関心をひきやすい、クイズやパズルを組み合わせた教材を活用することも多い

## 「高知から“地球市民”を育てるために」

世界を知り、自分たちとのつながりについて考える「国際理解教育・開発教育」。元青年海外協力隊員で、現在は高知県四万十町立七里小学校校長の坂山英治さんは、学校という教育現場で、その実践に長年情熱を傾けてきた。原動力となっているのは、世界を考えられる高知発の人材を育てたいという、一人の教育者としての思いだ。

第19回

## ゲンバの風



高知県